

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第二3:16~18 「あなたがたすべてとともに」

テサロニケ教会は信仰のゆえにさまざまな迫害や苦難を受けていた。まことの神を知らず、神に敵対する世界で信仰を貫いていこうとすると、さまざまな圧力や苦しみが降りかかってくるが、そのような状況において、キリスト者としての信仰と忍耐が試されるのである。また教会内からはキリスト再臨についての誤解から間違ったことを言い出す者がいて、他の人々を混乱させていた。また、何も仕事もせず、他人のおせっかいばかりして締めりのない歩み方をしている人たちもいた。パウロはこのような人たちに対する戒めも指示した。そしてこの手紙の最後の部分では、それらのさまざまなことを思いめぐらしつつ、祈りをもって終わる。その内容にはパウロの心情、心づかいがよく表れている。

[16]「どうか、平和の主ご自身が、どんな場合にも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてと、ともにおられますように」

テサロニケ教会は外からと内からとさまざまな問題に直面していた。そのような中で動揺しないで心に平安を持ち、信仰者どうしが一致して平和を保っていくことは大変重要なことである。それゆえ、パウロは平和の主ご自身が彼らに平和を与えてくださるようにと祈り求める。

教会に一致があり、調和があり、一人ひとりがあらゆる点において成長し、助け合い、励まし合い、赦し合い、愛をもって互いに仕え合っていくところに平和が生まれる。憎み合いさばき合いなどを行っている所には平和は与えられない。それゆえ、平和が与えられるということは、一人ひとりが一致して神のみこころに従い、正しい信仰生活を送る時に実現することとなる。パウロがこのように祈り求めるのは、主なる神ご自身が平和という御性格を持ったお方だからである。聖書の神は人に混乱や混沌、憎み、争い、不調和をもたらす神ではなく、平和を与えてくださる平和の神であられる。さらにこのパウロの祈りの対象は「あなたがたすべて」とあるように教会を構成している全員におよんでいる。テサロニケ教会は、気ままな者、小心な者、弱い者を含むさまざまな人々によって構成されていた。それらの人々も含めて「あなたがたすべて」である。問題のある人々を除外したり、敵とみなしてしまうのではなく、あくまでも兄弟として数えている。ここにパウロの愛の配慮を見る。

いつの時代のどんな教会でも、そこにはさまざまな人たちがおり、さまざまな問題が起こってくるが、私たちは主にある兄弟姉妹としての自覚を忘れずにお互いに愛をもって仕え合い、助け合い、励まし合い、そして愛をもって真理を語り、必要な時には戒めて、主の教会を建て上げていかなければならない。

[17]「パウロが自分の手であいさつを書きます。これは私のどの手紙にもあるしるしです。これが私の手紙の書き方です」

テサロニケではパウロによるという偽の手紙までも出回っていたので(2:2)、この手紙がパウロからの本物の手紙であることを証明する必要があった。彼は目の弱さがあったと思われ、普段は口述筆記を常としていたが、最後のあいさつだけは自筆であいさつを書いて、その手紙の出所の正しさを保証したのである。→ I コリント16:21,ローマ16:22,コロサイ4:18,IIテサロニケ3:17　ピレモン書はパウロが全部書いた。→ピレモン19　最後のあいさつについて何も言われていない手紙でも最後の部分は彼が書いたと考えられる。これがパウロの手紙の書き方である。
[18]「どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたすべてとともにありますように」

手紙の最後に彼は主イエス・キリストの恵みを祈り求めて終わる。主イエス・キリストの恵みこそ教会を教会として立ち行かせる基盤である。私たちもこの恵みによって生かされ、支えられている。与えられている主の恵みを感謝し、私たちとともにおられる主を覚え、力強く信仰生活に励む者になりたい。